

円珍の『疑問』と『些些疑文』との比較再考

——降三世の解釈を中心に——

寺 本 亮 晋

はじめに

円珍の『疑問』と『些些疑文』は、密教の教相・事相をはじめ、悉曇や宿曜など多岐に渡る疑問を収録したものである。これらの疑問は唐に解決を求めて記されたものだが、その答えとなる書物が存在したかどうかは知られていない。『疑問』は円珍の自筆本が現存しており、また『些些疑文』は巻末に「壬寅七月二十四日」とあることから元慶六年（八八二）の時の作とされている。古来より両書は同一のものと考えられ、『仏書解説大辞典』には「組織は同一であり、但しその文章に広略精麁の相違あるのみ」とある。また浅井円道氏の『上古日本天台本門思想史』（四〇三頁）には両書とも真撰とした上で、「両本の内容は大同小異であるが、些些疑文の方が整備されているから、疑問集は些些疑文の草本か。」と解説している。初期日本天台は教学を確立するために唐に決答を求めていたこともあり、この両書を比較・検討することは当時

の日本天台の未解決事項を知る上で重要であると思われる。そこで両書が真撰であることを前提に、多岐に渡る疑問の中から、今回は降三世を中心に安然との関係も考察してみたい。

降三世の同体と異名

降三世に関する言及は、円珍の著作の中では両書が圧倒的に多いことから、当時の円珍が降三世を重要視していたのは間違いない。以下は『疑問』に降三世の同異について述べている箇所である。

降三世因縁誠如_二師説_一。但約_二此尊_一合_レ有_二真化二形_一。其様如何。又大日經息障品釈中。不動明王降_二伏大自在_一。是瑜伽中義者。再勸_二指帰_一。理趣釈・寿命經等皆降三世所作也。未_レ見_二不動所為_一。緣_レ此本國持念家或云。不動召来。降三世踏殺。或云。指_二降三世_一為_二不動_一。或云。大日經釈錯。云云未_レ知_二是非_一。乞垂_二決判_一。

またこの箇所と同じような記述が『些些疑文』にもある。

○又降三世合_レ有_二多樣_一。且化身降三世様如何。○胎藏有_二勝三世_一。

円珍の『疑問』と『些些疑文』との比較再考（寺本）

降三世。若約法門其同異如何。○又瑜伽教中。云降三世踏大自在。而大日經息障品釈。云不動明王降伏首羅。云云此土人云。不動尊召來降三世踏殺。或云。息障品中。喚降三世為不動。或云。大日經釈謬。未知是非。快垂指示。

この両書を比較して見えるのは、『疑問』にのみ『十八会指帰』・『寿命経』・『理趣釈』の名を挙げている点である。『金剛頂経瑜伽十八会指帰』は金剛手が大威徳身を現じて降伏している点を円珍は問題としていないが、『金剛壽命陀羅尼念誦法』では降三世を流出して大自在天を降伏し、『大樂金剛不空真実三昧耶経般若波羅蜜多理趣釈』においても、金剛降三世が他化自在魔王を調伏しているのである。このようにすべて降三世に関する降伏の引用であり、円珍は『大日經義釈』や『大日經疏』の不動降伏説に対して疑問を持ったのである。さらに『十八会指帰』・『寿命経』・『理趣釈』はいずれも一行訳であることから、「或いは『大日經釈』の錯りか」といっているのである。

次に「大日經息障品の釈」とは、『大日經義釈』は「瑜伽金剛頂経説」とあり、『大日經疏』では「如瑜伽所云説」と文が異なっていることや、『大日經疏』が「大自在天」の語を多く用いていることから、円珍は『大日經疏』を用いていたと思われる。また不動が召来して降三世が踏殺するという説が、本国の持念家から此の土の人に変更されている点

も興味深い。

さて『些些疑文』巻上には「大日經釈中大自在天成仏号月勝如来。指帰中名怖畏自在王其由如何」と、大自在天の相違にも言及しており、さらにもう一箇所、同じく巻下には不動と降三世の同異について問いを発している。

○如瑜伽所説。仏初成覚。会一切衆。首羅心慢不肯從命。化作不浄而住彼中。時不動明王承命召彼。見其如此事。即翻受触金剛。令彼取之。云云即尋逃帰如是七返。爾時不動左踏其頂半月。右踏其妃首半月上。大自在使終而得授記。号月勝如来。云云此條在先。然指帰中云。降三世今此文与彼違。又受触即不動尊歟。若爾經何云不浄金剛。又或人云。不動瞰彼不浄而腹肚脹。所以彼尊其腹必大也。此有據不。

息障品に関して問いが並ぶ中で、ここも『大日經疏』を用いて受触と不動尊の同異と不浄金剛の異名について問うている。以上に挙げた二つの問いは『疑問』に相当する箇所がない。『大日經疏』息障品に関する疑問点として、円珍が改めて『些些疑問』に挿入したと考えるのが自然ではないだろうか。

安然の降三世に関する解釈

では『寿命経』に注目してみると、円仁は『金剛頂経疏』において『寿命経』を引用するものの、「有形寂靜」の説明に過ぎず降三世については述べていない。

安然是『悉曇藏』において、降三世に関して『壽命經』を用いている。

又光音天下生^三六欲天。亦生^三四州^一乃成^三四姓。劫初自在猶如^三色天。由^一一惡增^三生^三四惡趣。梵王化形下利^三人間。是名^三商羯羅天。亦名^三摩醯首羅。摩醯首羅亦有^三三種。一四禪主名^三毘遮舍。此乃金剛頂經^三初成道令^三不動尊降^三伏三千界主大我慢^一者是也。二初禪主名^三商羯羅。此乃大日經中商羯羅天於^一一世界^一有^三大自在^一於^三三千界^一者是也。三六天主名^三伊舍那。此乃壽命經中仏下^三須弥^一令^三降三世降^三伏強剛難化天王大后^一是也。故知般若菩提所伝南天祖^三承摩醯首羅^一者是大梵王製^三四十七言^一者是也。⁽¹¹⁾

商羯羅天を摩醯首羅ともいい、摩醯首羅の三種とは四禪天の主が毘遮舍、初禪天の主が商羯羅、六禪天の主が伊舍那天とし、『壽命經』に説く降三世は六禪天の摩醯首羅であること⁽¹²⁾をいっている。また『教時問答』でも『壽命經』を引いて金剛界の降魔の証文としており、また胎藏界の降魔について『悉曇藏』と同じ説を展開している。安然是摩醯首羅の異名について『悉曇藏』以来の自説を用い、それぞれの天では摩醯首羅の名が変わると考えているのである。

不動と降三世との同異について、安然の『菩提心義抄』には、

会^下不動金剛降^三摩醯首羅^一灰欲世界得^レ記^一作仏。降三世降^三摩醯首羅^一灰莊嚴界作^三怖畏自在王仏^一相違^上云。大日義釈云。不動金剛降^三伏惑障^一令^レ不^レ動^レ之。降三世令^レ發^三菩提心^一。上從^三色頂^一一

円珍の『疑問』と『些些疑文』との比較再考(寺本)

天処次第降伏而下。云云若依^三此文^一二尊各降^三一天^一無^レ失⁽¹³⁾。不動と降三世がそれぞれ一天を降伏するのだから違いはないといっている。また安然是同箇所に「然るに降魔の事は四土が不同なり。」といっており、降魔を四土と四身に配当して不動や降三世は同体で他受用土・他受用身の降魔と考えたのである。

つまり同体の証文として『大日經疏』の「如来説^三此二明^一。皆是彼法仏三昧⁽¹⁴⁾」に依っているのである。しかしこの普通真言藏品もまた『大日經義釈』と『大日經疏』では異なっており、『大日經義釈』では、

經云^三復次説降三世真言^一者。亦是成弁諸事忿怒明王。此中與^三不動尊^一少有^三差別^一者。不動尊是大恵火刀正以^三降伏^一為^レ用。降三世是大恵風刀正以^三撰召^一為^レ用。⁽¹⁵⁾

とあることから降三世と不動が同体とする証文には都合が悪く、と考えたのではないだろうか。

また『広撰不動明王秘要訣』卷三には『大日經疏』を「不動明王示^三現受触金剛^一吞^レ之⁽¹⁶⁾」と要約していることから、降三世と不動の同体以外は降三世の異名などについて疑問を持たなかったように思える。

まとめ

安然の『悉曇藏』は元慶四年(八八〇)、『菩提心義抄』が

円珍の『疑問』と『些些疑文』との比較再考（寺本）

仁和元年（八八五）と奥書のあることから、円珍の『些些疑文』の元慶六年（八八二）と著作年代が重なっていると考えられる。摩醯首羅の解釈に関しては『悉曇藏』からの四禪天の解釈や『寿命経』の引用からも、円珍と安然是それぞれ自然発生的に疑問が発せられたようである。以前に肉団心の記述から安然が『些些疑文』を目にしていた可能性に言及したが、⁽¹⁷⁾こと摩醯首羅については『些些疑文』のみを参照していたとはいえないようである。

しかし安然是、結果として円珍の用いた『大日経疏』を用いてまで降三世と不動の同体の解決を図っており、回答のない『疑問』と『些些疑文』を用いて教学を進める上での端緒としたのであろう。それは円仁が問題点として挙げなかった箇所にも注目し、円珍以降の疑問点を解決しようとした態度が見受けられるからである。

両書は同一の草稿本といった評価であるが、『疑問』の方が丁寧に經典の名を出していることや『些些疑文』にしかあらわれない在唐での記述も見られるなど、複雑な構造をすぐに紐解くことはできない。単純に大同小異と片付けられない問題点を多く含むことから、今後さらに考察を進めていきたい。

1 『疑問』巻上（仏全二七・一〇〇七頁下）。

- 2 『些些疑文』巻上（仏全二七・一〇四二頁上）。
- 3 『金剛頂経瑜伽十八会指帰』（大正一八・二八五頁上）。
- 4 『金剛壽命陀羅尼念誦法』（大正二〇・五七五頁中）。
- 5 『大楽金剛不空真実三昧耶経般若波羅蜜多理趣釈』巻下（大正一九・六一四頁下／六一五頁上）。
- 6 『大日経義釈』巻七（統天全・密教1・二五八頁上／二六〇頁上）。
- 7 『大日経疏』巻九（大正三九・六七八頁下／六七九頁中）。
- 8 『些些疑文』巻上（仏全二七・一〇五二頁上）。
- 9 『些些疑文』巻下（仏全二七・一〇六三頁下）。
- 10 『金剛頂経疏』巻六（大正六一・八四頁中下）。
- 11 『悉曇藏』巻一（大正八四・三七二頁上）。
- 12 『教時問答』巻四（大正七五・四三五頁中下）。
- 13 『菩提心義抄』巻五（大正七五・五四七頁下／五四八頁中）。
- 14 『大日経疏』巻十（大正三九・八〇七頁上中）。
- 15 『大日経義釈』巻七（統天全・密教1・三一四頁上）。
- 16 『広摂不動明王秘要訣』巻三（日藏八二・鈴木学術・三七二頁下）。
- 17 拙稿『台密における心の側面——肉団心の解釈を中心に——』（『印度学仏教学研究』五七巻一号）。

〈キーワード〉『疑問』、『些些疑文』、円珍、降三世、安然

（大正大学総合佛教研究所研究員）